奇說排悶録

二

へ13
3143
2

奇説排門録巻之二

忠義之部

自録
張夫子
張巽
石士鳳
蕭効用
費宮人
瓊枝曼仙
義牛
閻典史
歐敬竹
凌國俊等九人
孔四郎
呂尼
義象塚
義馬

春

へ13
3143
2
特

秦氏犬　義犬
毘陵猴　義鶴
龍

合十九種

田屋

忠義之部

張夫子

明の崇禎年号の初。永平地名の兵備道兵備の要害の地道は街道の張春と云者あり。陝西地名より孝廉親に孝あり廉直の徳あり挙られし人なり。清の兵城を攻る時。張春能く戦しが力つきて生捕る。太宗皇帝の御前に召出さる。されば屈服せざる。衆之を殺さんと欲す。上許して王のもと。闕廷禁裏に至らしめ其忠義を高しと賞じ給ふ。旂下の士に命じて。張公に従て学ぶべし。との玉ふ。張春も亦辭せず教ゆる道義を以てせ。皆敬ぐ之を事へ稱して張夫子と云ふ。至るに必南に向へ明の都江南に有終に清人の如く薙髮せず。上

曲て之に從ふ臣下に君て曰。真の忠義の人なり。彼等之に学ぶべし。張春卒するに及て上深く歎息し玉ふ。旅下の学者紙銭を以て奠て曰。敢て清德を汚さじと。天下定まりて後世祖章皇帝燕都に入せ玉ひて侍臣に君て曰。卿等昔日張夫子ある所知るや。南国に唯此一人あり。然るに之を識者なるを如何ぞやとの玉ひなり。

閻典史

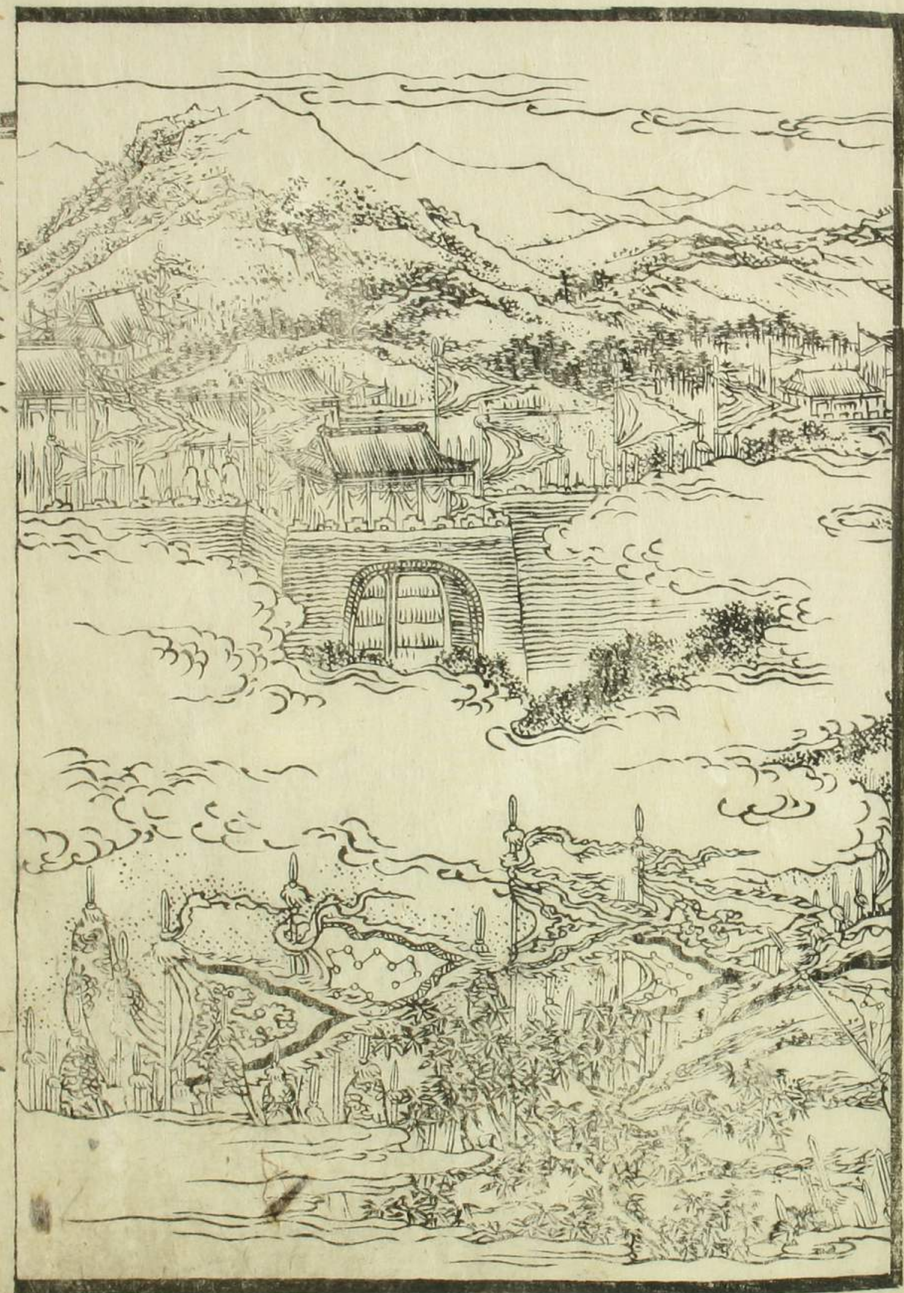
閻典史（閻は氏、典は官名）は名は應元字を靈亨と云て。其先浙の紹興（地の名）の人なり。四世の祖某と云者錦衣校尉（禁中を守る官の名）となる。始北直隸の通州（地の名）の人なり。應元椽史（下役人名）より起て涼倉大使となる。崇禎十四年江陰（地名）の典史となり。始て到る時海賊あり。船百艘ばかりに憑をなす。朝

に乘じて至て。乱を内地に入る。其勢猛にして城に近づきぬ。縣令は此時旁邑（近村）に往る跡あり。丞も（下役）主簿も恐れ怖きて男女唯逃るるばかりなり。時に應元刀鍵を帶び馬を躍らして大に市に呼て曰。好男子〻〻人者は我に從て賊を殺して家室を全くせよ。呼る此声を聞て從ひ集る者凡千計あり。ばかりなれども械のみに苦しむ。應元又馳て竹ある處に至て呼て曰。事急なり人ごとに一竿を假せ。直に我より取て〻と云に。千人の者江岸に列て並びて弔を林の如く立てり。應元かねてことあらば矢を發へ。一矢を放てば賊一人を射殺せ。たぐけて賊三人を殺して進べ。賊恐れて船に登て帆を揚て去ぬ。巡撫官に應元が功を奏て勅して都司（上役）に仰有て応元を江陰（地名）の尉に仕ず。徽

廻とく田く賊を捕る支を主どくしむ。是ふうを黄盖を張て縣を立て。前驅道を清つ行事格外ふ免さまし戎。邑人栄ありとせむ。久くしく勤功を以て廣東の英德縣の主簿とする。陳明選と云者応元ふ代て江陰地名の尉日付と成まり。應元母の病ふ依ていとゞ行ぞ。亦国の變ふ會ぬまべ。家中の者を引つまし邑練の砂山地名ふ居る。此歳乙酉の五月あり。此時清朝今の天下を得て。改元しく順治年号といつる三年ふあてまり。豫王親王の大軍江を渡り。金陵地名を降て君臣出て走る。宏光帝明帝尋で靺へらまし王ふ。清清朝こりて貝勒清の大將及它將を其外の將共遣し。東南の郡縣戎取る。國々の吏或ハ降り或ハ走る。又門を閉て距む者あり。之を攻まべ輙枝速なる八時を以て計べく。遲も十日を過まぞ。京口の境より以南南の界一月の間ふ名城大縣を下まるの百を以て數へ。江陰の地のみ彈丸の如き下邑なまし。堅く守ゞ故八十餘日あるく攻るく下やあ。是ふ応元ゞ謀ふまり。初め薙髮をべをの令下やる時。諸生の許用德と云者閏六月朔日ふ明の太祖の御容を明倫堂ふ孔子を祭掛け。衆を率て拜し且哭を。士民集る者萬人ばりと。此時新ふ尉ふりて陳明選を推たて城を守るる主らんとも。明選ゞ曰吾智ニ男間君ふ及ぞ。うふ大支ふ間君を用べしとく。夜騎兵を弛せて應元を迎ふ。應元家丁四十人を率て夜馳て城ふ入る。此時城中の兵千ふ満て家數億一萬ばりと。又粮を出さふ所あり。應元至て人數を筭へ見樓櫓を晉清し。民の一戸ふ一男子を出しく城屏ふ乘ぜしめ。餘丁ふを

餐を運つそ。又前の兵備道前の晉化龍が製せる火藥火器を城樓の貯ふ。又富める者の勸く財を出さむ令〜く曰。必金のみの非ず。粟。藏帛。布一切物の至るまでも出さべ〜と。程壁と云者首く二萬五千金を出さ。引續く出さ者ヨヲくあり。城中の集まるの火藥三百斤。鉛丸鐵子千石。大鎗百。鳥機千張。錢千萬。緡粟麥豆万石。其外。酒醋。鹽。鉄。芻。藁等此の準ぜり。斯くて分〜く城を守る。黄略とのふ者東門を守る。把總某南門を守る。陳明選西門を守る。應元こづら北門を守る。扨四門を徼巡を。部署始く定まぬる時の城下を責る十萬の清軍。城の四面十重に〜の圍を矢を射る事烈〜。城上疵を蒙る者少くなく。城内にも礮磯機弩を射出〜つるべ。清軍是のわりく死せる者ヨヲ〜。其よりて大礮を出して城を擊つ。應元鉄葉を以て門を畏まる。鐵の絙を貫くまは紙護る。又空棺の土を盛て隍の所を塞ぐ。歇又北城を攻む。北城の穴明きぬれば人一人の大石一ツを運ばせ。壘を築くるの一夜の〜く成まり。城中矢少きが故の應元計をめぐらし〜。黑夜の藁を束ねく人形を為て燈を点ぜ。投城中の兵士垣内の伏〜鼓を打て叫べ。其体繩の下やたく城を出ぐく。歇の營を襲んとせるの似て。清軍大の驚き矢を射ること雨の如〜。夜明て矢を拾ふるの筭のべくなれば。又壯士を遣〜夜歇の營の入。須風の火を縱へ。清軍大の亂て相殺死せる者数千。清軍城を卻て離ること三里の〜く營を作る。清軍責のべ大將帥

の劉良佐と云者。騎馬の兵を役へ城下に至て呼て曰。吾閣君と相識なり。我為に閣君に言へ相見えんと欲すと。應元城上に立て共に語る。此劉良佐は宏光帝四鎮（害の守る所の要四ヶ所）の一人にして。廣昌伯（廣昌地名伯は其所の守）に封ぜらる。然に清に降て今兵を總る者なり。時に應元に語て曰く。宏光帝をば走て江南（明の都）に主なり。君早く降て富貴を保つべし。應元曰。某明朝の一典史（小役人）なれども然も大義を知れり。將軍は国の重鎮（重役）にして。江淮（領地）を保つ事あらば敵の為に前驅を抑何の面目ありて吾邑の義を知れる。士民を見んとするや。良佐此言を聞て慙て退く。應元體大きく面蒼黑にして微髭あり。性嚴毅（生まれつきびくびくと物ごわきこと）にして。掟を明に守て犯を者あれば必ず仕置して少も許さず。さればこそ財を輕んじて賞賜を惜む事なし。傷つる者は必ず割口を畏れず。戰死せる者を棺を厚くして之を葬り。祭れば為に哭して壯士と語る時は必好兄弟と稱して名を呼べり。陳明選は寛厚柔和なる人にして。城を巡る毎に其士卒を慈み。勞する事に依て涙を流す故に。兩人共に士卒の心を得て。皆此人のために死せんと望む。是より先貝勒軍を統て地を取らんとして。蘇松と云者を攻て郡を破り。師を率て此城を攻て將に降て者兩人生捕て降れり。城下に來て跪て。兩將先泪を流して城上に呼て罵て曰。敗軍の將禽と成て速に死せざる何の為に泣やと呼る。清軍に入を遣て曰。四門を守る長なる者各一人



應元江
陰乃城を
守るく十
萬の清軍
戎防ぐ
清軍

を斬らべ即圍を解べしと云。應元声を厲しく曰。寧吾頭を斬る共何ぞ百姓を殺さんと之を叱つく云しむ。中秋の時ゐるとけまべ軍民ゐ月を賞ざる銭を與へ其人を分ちく引つまく城ゐ登らしめ酒を飲しむ。樂を制しく五更の比善謳ふ者ゐ唱ハき。斯するゐ三夜あり。貝勒想ふゐ此城内降る意あしと云く。攻る事愈急まべ。鼙聲晝夜絶ざ。百里の地是が為ゐ震動せり。城中死せる兵日を積く多く。哭聲聞えく止夏あ。應元義を勵しく櫓ゐ登く采配す。意氣自若平氣とこく常ゐ變らざ。一月朝より大雨降く日中の比紅の光一縷土橋より起ま直ゐ城西を射る。時ゐ城俄ゐ陷まり。是清の軍より大石火矢を放てる。清軍烟霧雨を分く群まく城ゐ登る。

應元必死の士百人を率く突く回ま戰夏八こび或殺さま或傷つく者千を以く数ふ再門ゐ至まが門閉く出るる能ゐざ。應元免まざと度ま。前ある湖水ゐ身を投ぐ水項を没せざ。劉良佐軍中ゐ令しく必應元を殺さざしく捕ま。と云。遂ゐ縛せく良佐乾明佛殿ゐ足を延しく居ぐ。應元が至まるをつく躍ま起く前ゐ至まく哭き。應元咲く曰。何を哭する。事ざゐ此ゐ至る一死あ耳と。さく貝勒ゐ見えく立く至せざ一卒鎗ゐく應元が脛を貫く。脛地ゐ暗びぬ日暮く應元を栖霞禪院寺院名の内ゐ繫ぐ。僧夜聞ゐ應元大ゐ呼ぶ。速ゐ我を殺せと云。終夜こで殺せくと呼ぶが俄ゐ寂とく吉ぬ。往くえまべ既ゐ死しく有き。應元城を守ま

清軍の攻るゝ。ふせぎ守るゝ八十一日。清軍城を圍者二十四萬人中く死せる者六萬七千人。巷に戰て死せる者又七千。傷つける者七萬五千餘人。城中死せる者五六萬戸。巷に満ち。然ども共一人も降る者無り。城破る時。陳明選ゝ ちぐちに成て大に戰〳〵。兵備道に至て身重創を負さるべ。刀を握て立るまく壁上に倚りまく仆ずして死せりと。又或ハ門を閉て火を投〳〵て死せりとも云傳へ

張聚

張聚ハ廣東布政陳選ゝ吏なり。明の成化年中中官の韋眷と云者。廣州を守て恣に民を虐を。時に番人夷の賈をなる者に力麻と云者。船を海上に泊め。蘇門答剌国（ソモタラ国 夷の国名）の貢の使と詐偽物を賣らんとなる。韋眷。利を欲するゝ故に之を許さんとも。陳選其詐を知て之を逐ひ遣る。韋眷又越人王凱父子を海上に遣て。私に番人の貨を買ゝむ。知縣に高瑤と云人。王凱を執へ其贓を發き見るに巨萬あり。陳選都に之を訴ふ。時に巡撫都御史宋旻を下〳〵て問ハしめ王ふ。宋旻韋眷を畏まく詰ず。陳選書を呈く高瑤を奬む。韋眷ゝ〳〵陳選を恨て。陳選と高瑤と官物を貪まりと告るまべ。帝大に怒刑部員外郎（刑罪の官役人）李子行。先に巡按御史（徐同愛）に仰て之を鞫さむ。行と同愛と皆韋眷に阿て。計て陳選ゝ黜けるる吏張聚に賄〳〵く陳選に罪を負せんを頼む。聚役ぎ李行其時張聚を囚へ呵責をるゝ。張聚が曰死さんと

ちくバ早く死せよ〜。私の憾を以て公義を滅し。正人を害せんやと云て
従ハず。李行終に陳選が罪をあげて曰。勅を矯て其属吏に官庫の
粟を遣きりと云を以て奏す。陳選思らるゝ徒罪 徒罪ハ軽き罪にて流し者
の科を蒙り。南昌地名に至て死る。友人張元禎此を葬る。張聚京
に出て闕に至り。上書して云る。臣聞く周公の元聖たるも。四凶の謗
なりて疑を致すを君に免まぢ 成王四凶ら十一鰥せて流言を作す 曾参
大賢にして、三至の言杼を投るを母に免まぢ 和名抄杼機之○曾子の母持緯者也 曾参人
を殺せりと三度告るまぢ 是皆口ハ能金を鑠し。毀て骨を銷ぜる物なる故
其子を疑ひ〜 支之
なり。陛下の明なる支日月に同く。恩ハ父母に齊し。何ぞ沽昌の中に尚
屈に羅り。覆盆の下復冤に沈むるのあるや。竊に考るに廣東の布政使

重役の官名 陳選少〜く寔學を崇て。夙に孤忠を抱て。群邪の間に處り
喪爭の地に立て。内官韋眷番人に通ずるの発る。知縣高瑤已に死
案す。陳選書ろく之を奬む。不直を正せハ監司の職なり。宋旻徐同
愛勢を怙好を保。眷を〜其意を恣にせ〜む。陳選を誣て貪ると
と〜聖聽を惑す。李行命を受て訊と雖韋眷が頭指を得て支を
曲て陳選を罪人とす。臣ひそかに小吏なり。渠あるを以て法に觸て
黜らる。寔に臣が罪なり。韋眷臣が憾あるんと欲て臣に厚く賄
て陳選を罪に陥さんとす。臣小吏なりと云共昧心を以て是非を乱さ
ず。韋眷乃李行を以て。臣を罪人と云て鞭うつの数日。身中完き膚
なし。李行韋眷が言を承引て。陳選詔を矯て粟を其属に與へ

其報を得んとすと云へり。是の共姜を殺す夏姫と。共姜ハ衛女夏姫ハ淫婦 伯夷
賢人なり首陽山に飢死 を詐く盗跖盗人盗跖が とするなり。近年嶺外の地大水あり。
民食すべき物なきに。泉藩之を賑ぐるが如くも。陳選獨り之を憂へ
上命の下らんを待時ハ民の命絶ぬ。仍て賑ひ救へる民の命を赦さん
が為なり。他あるに非ず。陳選性のと剛にして罪無しく奸人の虐を受
憤懣に任ず。旬日にして殂ぬ。李行速に死せんるを幸ひ。病中藥を與へ
ず。其養子を章春が乞に遣す。陳選が卒せる旨告ぐ喜びぬ。小人の
佞毒なる。此の如きを致せり。陳選行を潔しく讒に罹る。君門遠にして
誰か其寃を訴へん。臣罪を以て斥らること。死を甘しく申す。身ハ
昂に者人らる故惜しむ。こ忠廉の士を痛む。外に屈寃を負士あり。内

に讒佞のこびあり居る。聖明の累さんと書く奉まる。取上五人夏
そのあり〜ど。其後他事を以て章春が鎮守の職ハ罷らるるとぞ。

歐敬竹

歐敬竹ハ武進市 市の地名の人なり。古短くして大言を好む。生産無しく
城南の戈橋に居り。人の為に破れたる扇を脩て業とす。百錢を得れば
獨市に出て飲む。大に醉へば古を卷て歌へ。市中の人皆之を咲へ甲申
三月天子に変あり。明の亡るを聞て。隣人を招き共に曰。遠くこ汝と
別れん。汝我一杯の酒を盡せ。其妻壺を提て来へ。敬竹を見て笑て曰。
斯言良を休よ。今舊官皆新官と作と聞る。此時明の代亡びて今の清朝となる
我ら如き者何をせん。敬竹曰。嫗何を知らん。其こそハ此翁が死こを故な

且一と云へく竟に戸を閉て自經て死にけり。

石士鳳

石士鳳も武進市の人なり。家貧く妻子あり。略字を識れり。僕也。此僕も亦妻子あり。歐敬竹死して後数日あり。士鳳脯乾肉にして買て其先祖を祭り拜して且哭し。哭して鄰人を慰へて與に酒を飲る昼夜にして。潛に家を出て。忠義祠の池中に身を投じて死にけり。忠義祠は故宋信國文天祥及姚岩陳焰王安節以下の十三人を祀りてある所也。姚陳の諸公は皆宋の末に城州を守れる士也。城陷て死せり。其夏は宋史并に郡邑に見えたり。さて士鳳が死せるを人の知る者なし。曉に及びて其僕ありて市に哭して曰我主人死せり尸を見る

に得ずと。遂に池の旁に雙の履ある所にて尸を得たり。是より前士鳳いまだ死せざる時。ひそかに紙を剪て位牌とす。明布衣石士鳳之位と書て。忠義祠なる十三人の下に置きたり。又其隣なる棺を賣者に三金を與へて曰世亂れて吾此金を用る所なし。姑汝に寄る所と云へり。後に士鳳死しける時。棺を賣る者来て葬送の用意をぞ為る。其僕も終身妻を娶らざりけり。

変國俊等九人

崇禎癸未の年。賊（賊を朝敵を云）武昌（地名）を破る。岳州（国名）を襲ひ遂に長沙（地名）に討入ぬ。司理（官名に日本の刑部に）蔡道憲力盡て危坐して待ぬ。賊刀を抜て斷らんとするに怒罵て止まず。賊其足を斷て肉を以て揮る。又

首を断て遂に殺す。天子命ありて太僕寺少卿（官名）の官を贈り。忠烈と諡し玉へり。初道憲が子孫凌国俊等国俊を初め九人の者。道憲に従て去らず。賊此者共を説て道憲に降る事を勧めむ。国俊曰。我公節を屈せざる人なれば。吾等とてよりて去て今日を俟じと云ふ。賊刀を以て之を脅せば。復咲て曰。吾等死を畏るべてよりて去て今日を俟じ。賊あはせて之を殺す。内に四人が曰。願くは我主の骸を葬て後に死に就ん。賊義として之を許す。時に四人衣を解て道憲が屍を裹て。之を南郭（地名南の郭外也）に葬り自刎て死す。国俊が婦年少し。其子文志を撫して節を守り居り。常に文志に向て父の国の難に死せるを恥る。文志執政の人に行て歎き訴へ。拔国

俊を以て忠烈公の祠堂に附して配享せり。

蕭効用

蕭効用は漢上の蕭尭采が僕なり。宋孫景三と云者の田地を買て。景三が佃を耕しめ。歳ごとに其租を納しむ。一日効用主人の命を受て租五十金を集めて。家に帰るとて一里許を行くに景三與と計路めして之を奪へり。効用官に至て之を訟へ出べ。官急に之を捕へんとす。景三密らに又衆を集め。効用が夜宿せる處を同じ。炬を列ねて四方を圍む。棒を下すること雨の如し。傍の一人の兇者老嫗を一刀に断て。蕭尭采人を殺せりと大に呼ばり。此る尭采が露知らざるを。尭采因られて獄に入て。死刑に行はんとす。効用物狂ひの

如くなりて。日夜走りまわりけども為んすべなし。なる解せる者に遇て
いざせば好らんと云へる事を解せる者給て曰。汝主人に代て死なば主
人の命生べし。効用笑て大に喜び。穴に陥りたる由を文にかきて。又密
に鍛冶を頼て一尺ばかりの刀を打せて之を佩びさて遍く一族の者
に辭し。主人の婦の前に跪きて。とこかりに出せ自愛し玉へと云て。一語も
已が妻子の上に及ばずして出て行きたり。時に按察御史目付應公と
云る人。獄を嶽し玉へ日ゆく。主人の蕭堯宋も蓬首にして。囚人の中に
在りて生ける人の如くなりけり。効用其側に立て此を伺しが忍びず。忽
左の手に宛状を持て。右の手に利刀を出し大に呼ぶ曰。天なる子孫氏
の老媼を殺せる者は堯宋に非ず。斯云へ蕭効用なりと云て自刎す。血

わどりて御史の憲堺を赤くし。應公の繡衣に濺ぐ。應公
大息して其状を署し。命じて人に負はせて出さしむ。出て目を開
て正氣無けれども。口言ちんと欲するが如きること三日。幾ばくの両を
費。少く正氣つきて曰。吾死して主人生るを得ざれば徒死なりと
云へり。守る者告て曰。汝が主人已に生ぬ。減なるべしと云へり。効用遂に死
を年三十八なり。時に按臺より渚の監司に及まで。憐て葬の費
を玉へり。堯宋は免されて家に帰る。

孔四郎

勲衛の地名嘗守経は鳳陽地名の人なり。優人孔四郎と云者を愛して
らへり。孔四郎は紹興地名の人にて文に通じ誼を尚び。嘗て恩情に感

しく遂に身を寄て之が事に嘗常に縉紳の家に出入せるに必ず孔四郎を伴ひ行く。嘗武職なれども家大に富れり。闖賊李自成と云賊乱入せと聴て嘗四郎と謀て蓄たる金を他所に匿む。賊将宮撫民と云者之を知て嘗を搏て拷問を。次に四郎を執えて責め問へ四郎已るを得ず金を匿たる所を云。嘗は囚となりて入と共に害せられぬ。撫民四郎が姣しく又文ある故以て麾下に留めて愛を。翌日撫民酔て四郎が歌へ舞えて楽む。夜に入て撫民が睡れる後伺ひ孔四郎潛に刀を抜て刺殺さんとするが心せるとて撫民が股を刺す。撫民覚て声をあげて呼ぶ。四郎云そんじつ遁るべうなりと知て刀を提て罵て曰。我嘗守経と骨肉の親なりも勝て。生死を同くせんと誓へり。奴其財を奪ひ又其命を隕せり。我今守経が為に仇を報ぜんとして事成るべし。死して鬼となりて賊を殺し。守経が為に仇を報ぜんと罵て遂に殺されぬ。

費宮人

費宮人年十六なり。何れの處の人なるか知らず。容も意を勝れたりとぞ。明の懐宗帝后に計て。御女の長公主帝の御女を公主の侍女となす。王に公主憐れみて深く宮人帝の閨賊が国を乱る故憂王に云て。女心に竊に怒りて。侍組王承恩に向て怒の有りさまを問ふ。承恩曰。汝深宮に居て此を知て何せん。宮人曰深宮に居るが故に知らんる故に問ふ。預せんすべと

費宮人闖賊の為ゑ公主と偽て新婚の帳ゑ羅姓を斬る

覚悟せんとすりと云ふ。承恩意ふ之を奇とす。斯く妄のみく熾ん
なりて帝の憂いつく深けとば。宮人承恩を向責るるも愈ゑげ。
承恩曰汝いんぞ他人ふ向ひ〳〵数我ふ対て向ふや。宮人日朝臣
皆怠りく一人も君と図て意ふ者なし。吾公が忠誠ふ知る。
故ふ相向のこと。承恩益奇とく日。汝預、討んと云其計支のん。宮人
曰り不幸ならば惟死せんのこ。然ども徒ふ死をべくんぞ。承恩曰古人の
詞ふ生る者とく死るふ。死せる者とく復生ぬ。生る者其
言を食ずんぞ信と謂べし。汝之を能せんや。宮人日其時ふ至らば公
こんべし。茲ふ又魏宮人と云者あり。年貴より長じく是も貌美
なり。素より貴と相善。貴が言を聞く日。汝が計甚成難し。吾そ

難とすれども能ハず。其時ふ臨よば死しく志を伸べんのこと云。承恩
之をも奇とす。甲申三月十九日。闖賊李自成都城を破る。王承恩
走く帝ふ報ず。帝后と泣く御いとまおひ有て。宮中の人ども居
て泣ざるハなし。后自縊とく失せ玉ふ。寵愛の表貴妃も同く縊と
ぬ帝剣を抜く妃数人を手ふ掛玉ひ。公主を呼くのくハく。両年十五
何ぞ不幸ふしく牧家ふ生とるやとの玉ひく。左の袖ふ御泪を掩ひ右
の手ふ刀を執く。公主の左の臂を断玉ふ。さて公主死しぬ。帝
御手慄く殺し玉ふ忍びず。承恩と共ふ南宮ふ至て。萬歳山の
壽皇亭ふ登りく御こゝろ縊と玉ふ。承恩もつゞく縊とく失せ
けり。時ふ尚衣監（尚衣ハ帝の御衣の類裁縫つる役監ハ其あづかる日本の縫殿頭ふ中る）何新と云者。趨く宮

に入て帝を見まゐらせ奉はざるに公主の地に仆まさせ玉へり。他の宮人悉く道に立て費宮人のみ側に哭し居たり。相共に救ひ奉まゐらせ玉へり。父帝我に死を玉へり我何ぞ敢て生を偷まん。其うへ賊至らば宮中を索めて我を捕へべし。いかぞ逃るを得ん。宮人曰願くは公主の御衣を婢に賜へべし。婢賊を詐て公主を脱せしめん。落行ゐ給玉へと何方か好らんと云へば。何新が云園丈の第可なるべしと云へば。公主の衣を宮人に與へ位を別まに玉へり。何新は直ちに公主を背に負てまぎれ出ぬ。扨李自成は承天門を破りて宮中に乱入らんとする時。魏宮人大に呼て曰賊大内に入まゐらば我輩必ず辱を受ん。志ある者は早く計るを為らと云へば。身を躍らして御河の流れに沈む。此に従ひて死する者三百人ばかり。水紅粉に染まりて河水赤まるが為に流れざるなり。費宮人も入て死せる成に送まゐらせ。我衣服を脱て公主の服を着し。井の中に投まゐらせ居る所を賊引出して李自成に見えしむ。宮人曰我は長公主なり汝無禮をなすべきと云。自成は中に其美なる成喜び此成納まんの意あり。自成又天子の御座に陞らんとする時。忽目眩き神消るが如くして白衣の人長数丈なるが前に立て帝も亦傍に在まとこえて心に大に恐る。此に依て長公主を以其愛将なる羅姓に與へ此に闖賊が下に殊に軍功なる者なり。其勲功の賞に與へ羅喜ぶるの甚。宮人曰闖が言吾背く。然れども我を帝の子なり。汝祭を

設て先帝を祭り。且難に從へる大盜王承恩を其側に祔し祭り。殷勤の禮を盡さば我汝に從ん。羅更に喜て清に儘に從ふ。宮人泣て完帝を拜し又承恩を拜して曰。王公王公爾能死して復生る以て吾言を聞んや。吾前の言を踐ちんと云て泣ぬ。渚賊大に樂び張て羅が新婚を賀す。羅いたく飲て大に醉て内に入る。宮人又酒を具て新婚の盃を勧む。羅大に悅て引つづけ飲て。吾子を得る事陶王の惠の厚ぎ致を所なるべし。通の文を上て謝を述んと欲て書をあらんと云ふ。宮人曰是は難きに非ず。我よく此をあらむ間君はまづ寢玉へ。書して了らば君を起して。羅愈喜びて臥仆れて鼾の声雷の如し。宮人侍女を屏け獨燈を挑げて坐す。叔内外共に寂として静まぬれば。紀道を取出して羅が喉を刺す。羅躍て起てんとすれども仆るるのみ。衆賊此声に驚て戸を排き入て救るに羅既に息絶てあり。傍に華燭光明らかなり。宮人を見れば正く坐して物いはず。審に是を視れば我と項を到て悠然として近ぬ。疾自成に告げれば自成駭き歎て禮をなす此を葬りて。此を公主の死して王に報ずと云て復公主を索むるのをせざりけり。

呂尼

明の正統八年。英宗皇帝親師を帥て北虜の酋を征し玉ふ。御駕を出る時に陝西の地名呂尼馬を叩て諫て死しぬ。果して

此戦利あらざど帝北虜に囚と成玉へり。其後英宗重祚し玉ひ順天府に保明寺を建立し尼の肉身を寺中に祀玉へり。俗に此寺を皇姑寺と稱せり。雅望曰據資治通鑑三篇及皇明通紀等英宗征也先在正統十四年今云八年者疑誤

瓊枝曼仙

明の末に張献忠と云者。荆州国を破り恵府恵王の御きんの楽戸数十人を召く酒宴をなす。妓の中に瓊枝と云者色藝ありて殊に献忠瓊枝に命じて歌ハしめんとす。瓊枝曰我身賤しいなれ何ぞ歌ひて賊の鱗をきめんやと云て後ハず。賊怒て刀を抜て瓊枝を挾む。瓊枝曰汝が為をなる此に止まるなり。我死を畏るゝ我をいろんと為んと云献忠いよ〳〵怒て瓊枝が身をすこに断て犬に食せり。又同時に曼仙と言者あり。献忠召て試むるに此をこなしてよく盡て歌ひ勤て意に叶ハざるに故に献忠大に悦び寵愛せ事比なし。献忠毎夜寝んとする前に必大に酒を飲む。是又仙傍に在り。曼仙ひそかに毒を酒に入れて盛て献忠に飲しむ。献忠酒に毒あるを知らず眠睡するあやうきに曼仙が頸にひをかけて汝先飲よと言。曼仙否まんとすれども免れずして取て飲て立ざるに斃れぬ。献忠始て覚て其戸を磔にせりとぞ。献忠が勢ひ猛なれば士を立る諸臣ハ皆逃げ走り。或ハ降りて臣となるものも多し。瓊枝ハ娼妓にして身を顧ずして死するなり。忠臣ハ我士のなれ所に劣らぬ。曼仙が毒の計ハ事成りも成らぬを死に色まで覚悟

し家のめうや。若成るべ國の為に賊を殺せの功大きゝんと。先飲て斃れてすなわちこれ其俠烈の氣千載の人をして憤し且歎せしめらんや

義象塚

馬隆州のうちに義象の塚あり。明の天啟年の間水西地各の安氏叛きて衆を率て州を犯す。滇省滇は國の名省は其國のぞく多ぬ始の備をなす。撫軍一日分よりて陶土司陶氏の庄屋に調て凛げむ陶の家に二ツの象を畜へり。日の暮る比山洞の中に伏して鼻ゆて泥水数斛を吸て。大に哮跳て直ちに賊壘に至り。鼻にて泥水を噴て賊駭て顛倒し鼻にて賊を卷空に擲て墜て死す。陶が股肱と頼める勇士機に乗して北る我逐て大に捷るを得たり。曉に及びて師を收め退く時象毒矢に中て斃れぬ。土人此を德として南山に葬り。今に至るまで春秋に其塚を祭れり。

義牛

義牛は宣興の銅棺山の農人吳孝先と云る者の家に畜る牛なり。力あり。德あり。日々に山田を耕すること二十畝。飢ることなし。田の苗を食はるなり。孝先實に義に孝先が一子希年と云る年十二にして牛の背に跨て行に乘て遊ぶ。牛澗水のほとりに草を食み。忽一ツの虎あり。林中より出て牛の後に伺て希年を攫んとす。牛此を知て身を旋して轉じて虎の方に向ひ徐に行て草を嚙む希

年惧まりて、牛の背に伏して動き、虎牛の歩を来るを見て、唖唖として候。牛虎のそば近くありて、遠に斜にして力を出だして、虎に觸る。虎は牛の背なる小児の目をかけをりて避るにひまおく。牛の角に突倒されて其後狭き澗の中にのけさるに落て身うごきもえ為ざるに。水は堰るまでにかさ増して、虎の頭を浸して斃けり。希年牛を驅て帰て斯と父に告げて、衆人を集め虎の死して居る處に至て舁持来て此を烹るなりとぞ。茲に孝先が鄰家に王佛生と云者あり。孝先と水の論をなして、争に佛生家富て恣なる行をなして、村中の者常に悪を居うして、此たびの争佛生が無理なる由を人毎に云て孝先をひく。佛生まもなく怒て其子を率来て孝先を毆死せり。希年此事を官に訟へ。佛生邑令官に厚く賂を贈りて、なんぞ反て杖を希年に加へ、遂に希年を杖下に斃しぬ。希年外に兄弟なく、此冤を白す者なし。孝先が妻周氏日に夜に哭して、歩くに止まず。ある日牛の前に至りて泣て牛に謂て曰、曩に幸に汝が力を以て吾児虎口を免れしむ。今父子俱に讐人に死されぬ。皇天后土誰か吾が恨を雪ぐと云て伏沈て泣く。牛此言を聞て大に怒て抃ひ鳴きて、走出て佛生が家に至る。佛生父子三人客に向ひて酒飲居るに、想はずして牛登りて来て、先佛生を觝斃す。復二子を觝て斃す。客棒を持て牛と鬪ふに、皆傷を蒙れり。鄰里の者異て邑令に白す。令此を聞て怖れて其夜息えて死にけり。抑人の子の不肖なる父の仇ありても報えざる者あり。此牛吳氏の為に父

子の仇を報ぬ牛のごとく義を知るもの今ゞ之を聞く怖死せざるも理ぞかし。

義馬

義馬ハ士口水地名の王禎ゞ乗る所の戰馬なり。明の成化二年丙戌王禎愛刎の国名通判なる時重役の官名荆襄地名の賊等刼しく境内うち入しゆ王禎向て之を征せんとを同知の王某賊を怯れ王禎とゝを合せざ。指揮官名なる曹能栄成ハ元より王某ゆ與し伴く。王禎を欺く大昌地名ゆ赴く戰ふ爲しと云く共ゆ出陣しく。王禎を深入させく両人へ引返しく道を返すあ。王禎泥中ゆ陷り大ゆ叱しく賊を罵る。賊怒く王禎ゞ喉を断り又左の股を断く殺せり。王禎ゞ馬死走りく府門ゆ帰り屋敷ゞ門内へ入るゝ

得ゞ長嘶く扃を踏む其さゝ哀状を告るゞ如し。守る者戸を開く此を入るゝゆ血ゆ染くく鬣も紅ゆゝ見て。大昌の地蔑を去るゝ三十餘里あり。衰始く王禎ゞ討死せりと知く狡々ゝ。然れ賊ゞ退ぎ後二十五日あく尸を取く棺ゆ收む王禎ゞ子ゆ廣と云者あく貧ゆく家ゆ帰るゝあく。是非なく行李並ゆ馬を售んとす爲ゆ王某意ゆ馬を買んと想。云く竟ゆ値を遣らざしく馬を取る。棺を送く二十五日を過し夜半の比馬哀く鳴ゆ甚異し。王某林飼者ゆ云ひく莖草を増く飼しむ。其夜止やざ。王某林飼者を疑ひく自往く櫪厩を見れば。馬驟ゆ前来く項ゆ齧つ久しく離し七又首を奮ひく其胸を搏きく地ゆ仆しゆ。翌日王某血数升嘔く死

せり。賊平ぎて有司役人賞罰のさたせん時両人の指揮へ殊せるとぬけり。

秦氏犬

秦邦ハ明の永樂年の時の人なり。家富て幼き子あり。京に往んとて
トコロにて不吉なり。妻も留けれ共聽ざ〳〵て舟に乗て往んとす。
家に白犬あり。秦邦が裾を啣て留るさまをす。秦邦悟らざ此犬を
挈て偕に舟に乗て行ぬ。張家灣と云所に舟を泊るに。盜賊王甲
王乙と云者刀を拔て舟に入秦邦を刺殺す。犬後艙より躍出て賊を
噛んとする時賊刀を奪て逐ひ水に飛入て遁去ぬ。二賊敗を奪
尸を水辺に埋て去ぬ。犬二賊の後に付き往て賊の家をえて。又歸て来て

秦邦が尸の處に至て泣て之を守り。晝は食を乞ひ夜は其側に伏す。斯
て月を経ぬ人あり怪奇也と云々。其比廻河御史呂希望と云人此事
を検分しあり犬の事に犬號呼て前に向て跪く。其さま訴るに
似たり。呂御史異ものなりと曰。此冤を訴るならんと吏を犬の傍
に遣せり。犬尸を埋たる所に往て足にて土を爬り。寄て視れば人の戸
あり。呂が云此犬の故也ゆへに害せられしなるべしと云て。犬に向
て害せる者を知りやと問へば犬尾を揺して先ぎて往く。吏犬に付て行
ること一里ばかりにて家あり。二賊人を集めて酒飲て居り。犬先入て甲
が衣を噛て次に乙が履を噛めり。吏急て縛へて御史の前に引来て拷
問し責めけれども服せず。時に人あり入て跪き泣て曰。其尸あそ我主也

曹能柴成る
欺き来る
王禎賊軍の
中に
忠死す

おなじ。我も主と共ゐを負しが。水ゐ落入て不忍幾ゐ泳ぎつゝて命
をとりつゝと云。二人の賊遂ゐあり〳〵さゐを云て罪ゐ伏しぬ。此僕棺を
らの〳〵戸を載せて帰るゐ犬又之れ随て往々。昼夜柩の旁を離れ
ず時く声を挙て悲号を。こゝる者涙を隨さるゐ。帰りつゝて葬を
ゐるを時犬柩ゐ隨て墓所ゐ至て。葬り畢る我見て、大ゐ號びく傍
ゐる木ゐ觸て倒れ死ゐゝり。人哀みて秦邦ゐ塚の傍ゐ埋みとゝむ。

義犬

丙申の歴の比太原地名の客。南方ゐ賈〳〵て還るとて。橐ゐ金五六百
ばかり入れて持て。中牟縣村名の境を過とて道の邊ゐ憩て居る
ゐ。傍ゐ若き男の犬を棒ゐ縛りて荷きたるゞ同さまゐ憩て居ぬ。此犬

客の方をうかゝて哀げなる声を出〳〵なく。其さまゐ救ふとよと云ゞ如し。
客忍びず〳〵て銭を出〳〵犬を買て放ちやゞ遣る。少年客の懐中
の重きゐ眼をつけ潛ゐ跡ゐ付き往て人無處を見合て。一棒ゐ彼客を搏
殺し。小橋の下の流ゐ戸を曳往て葦を上ゐ掩ひ懐中なる素を取て
背ゐ負て往る。犬ハ客の殺さるゝ見て少年の跡ゐ付き往て
其家を認て帰来て直ゐ縣中の衙門ゐ走て往々。縣令
座ゐ升て獄を聽王ゐ時なり。犬地上ゐ伏〳〵號ふさゐ哭るゞ如訴ゐるゞ
如し。吏ゐ逐ゐ驅へども去らず。縣令曰汝何の冤なる吾吏を遣て汝ゐ
隨ハしめんとて。吏ゐ命じて犬ゐ隨ハしむるゐ犬吏を導て走て。客の死
せる所ゐ至りて水ゐ向て吠る。吏ゐ葦を掀て戸を見て又帰りて其面を

鼓ゝ。想ふに賊を捕へんがゝ無しと申す。犬使に隨来りて弱る前の如し。縣令曰汝能賊を知るゝ我吏を遣て汝に隨はせん犬又出んと。縣令吏に仰せて数人を遣て犬に従ハしむ。凡行る二十里あまりに〻く村あり。なやしの人家ある所に至りて一少年を見て犬跳て其臂を噛て血を出す。吏ども之を縛て縣に至て拷問ゝ遂に罪に伏しぬ。其金を問ハば尚在りと。自状す。吏を少年が家に遣ハして之を探らしめ見るに槖中に小き籍あり。居所姓名を記す。縣令の小手を獄に下し槖中の金ハ籍て官庫に納めつ。然るに犬又縣令の前に手を吹て吠てやまず。縣令曰客死ゝ是共其家尚あり。此槖金他が家に與ふ歟ゝとあやと云て又吏を太原に遣て王に犬も亦後に付て往る。既に至れば其家始て主人の死せる事を聞て驚き。又槖金悉その由を知て大に感ず且泣く。客一子あり。とゞに旅装して吏と伴ひ来りて賊ハ獄中に死ゝ。縣令槖を与て其子に與へ王ひぬ。其子櫬を函に送て返れば犬又役ひ往く。凡数千里の旅の途を或ハ宿ゝ或ハ想ふるに人と聊も違ざりけり。

毘陵猴

萬歴年中毘陵地名に乞兒あり。日々一猴を繋ぎて街坊に至て技を為さしめ銭を索む。数年を積て五六金を蓄ふ。不圖同伴の一丐と酒飲けるが醉て之を誇て云ふ。丐聞て惡心を發ゝ毒を酒に入て強て飲せ死れば竟に死ゝぬ。其藏める金を取て尸を野外に座あり。人知

ものあり。多く猴のこと彼が従ひ。依て日々に鞭うちられて猴勉めて之に隨へり。一日猴何ゝ人往来見えず。此時縣尹代官張廷傑と云人初て崎の司に任して。堂に升り玉へる所に一ツの猴来て丹墀の下に跪き〻跡ふ張廷傑に異なりとて一隷に命じて猴の往方に従ひしむ。猴前に立て養病院施行所又養生所に至りて丐を覓て居らず。復隷を拉て行途に糕餅を乞て隷に與へて無心となりさしむ。さて行て大市橋に至りて丐に逢へり。猴両手に拽て丐が肩に跳り上り頰を打ち面を抓て丐隷執へて縣に至りて張廷傑鞫問し玉へるの再三あれども丐始て辜に伏しぬ。隷を〻て丐を伴ひ銀を取らしめられに包裹ありて在り。扶野外なる浮屠土の所を堀れば尸出る所を棺に入て火を焚く時猴

隷に向て頭を地に入て禮〻跳て火中に入て焚け死ぬ。隷其由を縣に申せば張廷傑驚き異〻と且感じ玉へり。義猴記と云文を作て石に刻て末世に遺されしとか。

義鶴

審山の周氏鶴二ツを畜へり。順治乙酉の年周氏門を閉て死せり。國の乱に死を兵鶴を奪ひて溪上地名の陳氏に鬻ぐ。然るに其雄主の別れを哀て鳴て食せざるして死せり。雌他の雄と偶せざる。一日野に翔て審山の浮圖塔の辺に来れば羽うち飛て百里を去らず。審山に至りて浮圖のあたりに徘徊すること三日なり。周氏の僕某之を聞て往て観るに。鶴僕を望て踊て懐に入て出ず。僕携て家に帰て飼ふに貧しければ魚と粟を與へる

つゞかさりゝ。鶴ゝゝ竈下に至て洗ひ流せる餘粒を啄む或は竟日飢るるもあり。毛羽も凋ゝとあるゝ共他に往返す。知る者あるべし皆泣さりとゝん。

竈

康熙七年。松江の黄浦の漁人一ツの竈を得り。徽商あやまりて銀二三両に買て浦に放ちゝぞ遣ゝ。漁人商の銀を多く持ゝる成ゝて夜舟に入て。刼ゝゝく先舟子と小僮を殺し商跪てゝまけ玉へと云ゝ盗其手足を縛水中に投入ゝ。然るに水中に物ありて員ゞ如く流に逆て上行ること二十里許せり。夜明て舟の来るを見て。商声を挙て命を救玉へと呼ぶ。此舟は巡兵ゝゝ。大竈の人を負ひ来る成ゝて其故を問ゝ。縄を解労りゝく恐らく其人漁人等成べしと云。竈又流に随ひて下り往けば異船此に遭ゝ。往に昨日に買ゝ竈忽水に沈めぬ。漁舟ゝゝ。ゝ銀を分ち居ゝて。巡兵舟に乗入悉に捕に。ゝゝ。奪へゝ銀四百餘両一厘も少ゝ。盗を松江府松江は地名府は役所に送ゝ。商は舟子と小僮を殺さるゝ。其ゝ郷に帰ゝゝ太守に之を訴ゝ。知會文書を出す。盗を捜ゝ漁人共は立ゝ。ゝに斬ゝ一人も脱る者ゝ。

吉田屋